

岡崎むかし館

薬研 (くすりおろし)



岡崎むかし館 蔵



薬研は漢方薬の製造や花火の火薬製造などに用いた道具で、「くすりおろし」とも言います。鉄製が多いのですが、木製や石製、陶製の薬研もあります。細長い舟形で、中央がV字形にくぼんでいる薬研(臼)と円板形の車に軸を通して持ち手とした薬研車(磨り具)からなります。使い方は、座って、体の正面に薬研が縦長方向になるように置き、くぼみの中に薬の材料を少量ずつ入れ、薬研車の軸を両手でつかんで前後に回転させて押し砕き粉末にします。この道具は中国の唐の時代に発明され、中国名は薬碾といい、日本には11世紀(平安時代)にお茶をひくための道具として茶碾が伝えられています。当時の中国では、茶碾よりも細かく「粉す」ことのできる茶臼(石臼)もあったのですが大変高価なもので、身分の高い人しか所有できませんでした。

薬研は、現在ほとんど見られない道具ですが、金属や石類にV字形に文字を彫り込むことを「やげん彫」、V字形に掘られたお堀を「やげん堀」と呼び、その形態が語源とされ、薬研が人々になじみ深い道具であったことが感じられます。

<参考文献>

- 『日本大百科全書』小学館、1989／『世界大百科事典』平凡社、2005
- 『絵引民具の事典』岩井宏美ほか 河出書房新社、2008
- 『日本民具辞典』日本民具学会 ぎょうせい、1997
- 『粉』(ものと人間の文化史 125) 三輪茂雄、法政大学出版局、2005

